

初めての英国旅行



若 者

尾 崎 公 洋*

博士課程(大学院博士後期課程)も5年目になった春、教授から国際学会(IIW:国際溶接学会, 1993年夏)で発表していいよというありがたいお言葉をいただいた。ついでに、数日間の休みをいただき、博士論文をまとめる間のかの間の休息を海外で過ごすことになった。行く先は、英国スコットランド、日程は8月27日(のはずであった)出発、9月5日帰国の約10日間の旅であった。

私は、最近の学生(?)にしてはめずらしく、海外経験は乏しく、これまでアメリカ西海岸に行ったことがあるだけである。したがって、英国は初めてである。この話があったとき、海外に行けるうれしさよりも、不安が先にたつた。何をかくそう(別にかくしてはいないが)、私は英語が苦手である。ちょうど英国には、海外出張で働いている友人がおり、早速連絡をとると、スコティッシュイングリッシュは、なまりがきついいよと言われ、普通の英語もできない私が、なまりのある英語が分かるわけがない、と途方に暮れてしまった。かつて米国へ行ったときは、友人たちと一緒に、団体旅行ということもあり簡単な英会話で十分であった。しかし今回は、発表しなければならないということで、身振り手振りの単語英会話では通用しない。そこで急ぎょ、私の車の中は、英語一色となり、助手席には英会話集や単語帳が幅をきかせ、カーステレオからは、ネイティブ同士の会話が繰り返

返し流れることとなった。

さて、綿密な計画のもといざ出発……となる予定だったのが、プロシーディングを書き終ったのが出発直前となり、発表原稿が未完成のため、コンピュータ持参で現地へ乗り込むはめになってしまった。成田発ロンドン行きBA008便に乗るために、大阪空港から国内線で成田に向かった。ところが、おりしも台風が東京を直撃しており、成田上空を旋回した後ランディングを2回試みたが、結局失敗に終わり、大阪に戻る事となった。ジャンボでタッチアンドゴーを経験した人間は、なかなかいないのではないだろうか。旅行社と連絡を取り、ひとまずその日は家に戻り、翌日の再出発を待つこととなった。旅行社が翌日の手配をきちんとしてくれたので助かった。やはり、こういうトラブルがあったときには、プロに任せるのが一番である。それにしても、いきなり初日からつまづいてしまい、ますます不安が募ってくる。翌日、今度は何事もなく(成田で長時間、待たされるのは良くあること)ロンドンに到着した。出発がごたごたして、慌ただしく、また、到着が夜になってしまったこともあり、まだ、海外に来た、英国に来たという実感が無い。この日は、ロンドンに一泊した。翌朝、国内線にてグラスゴーに到着、空港からタクシーに乗りホテルに向かう。このタクシーが白タクであることに気がつくのは、後になってからであった。ホテルでチェックインをすまし、重い荷物を置いて学会会場に行く。いよいよ学会がスタートした。

1. 学 会 初 日

学会会場はSECCと名付けられており、海に面した所にある、比較的新しい建物である。周辺には何も無く、地下鉄の駅から少し離れて



*Kimihiro OZAKI
1963年10月11日生
大阪大学大学院工学研究科溶接工学専攻博士後期課程修了
現在、通産省工業技術院名古屋工業技術研究所、研究員、工学博士、材料加工
TEL 052-911-2111

いる。大阪で言うと、ちょうどインテックスのようなところであった。初日は、開会式に出席し、ここでいきなりショックを受けてしまった。何を言っているのか分からない!! やはり付け焼き刃ではだめだ。会話なら聞き返すこともできるが、一方的に進行されるのでつらい。とにかく、耳と脳をフル回転させてしばらく聞いていると、耳が慣れてきたのか、単語がある程度耳に入って来た。そうすると最初に比べて、かなりわかる様になってきた。ただ、たまに会場が笑いで沸くのだが、それが良くわからない。関西人である私は、笑いにはうるさいので、笑いが分からないとしゃくにさわるのだが、おそらく西洋の歴史や文化を知らないとわからないのであろうと勝手に解釈をして、気分を落ちつけた。

2. 古都エディンバラへ

私が発表するセッションが始まるまで1日余裕があるので、発表原稿が完成していないにもかかわらず、エディンバラへ観光に行った。グラスゴーからインターシティに乗ってエディンバラに向かう。インターシティというのは、日本で言う新幹線のようなものであるが、大きく違うのが、その動力源がディーゼルエンジンだということである。このエンジンが強力で、時速200キロ近くで走るそうである。ただ、大出力エンジンのために、騒音が激しく、そのおかげで、駅構内は異常にうるさかった。このディーゼルの騒音のせいかどうかはわからないが、現在の日本の電車のターミナル駅とはまた違った、独特の雰囲気をかもしだしている。幼いときに見たような、聞いたような、非常に懐かしい感覚になった。おそらく、日本にまだディーゼル機関車が多く残っていた時代の駅というものの記憶が、そのような感覚を作り出したのであろう。エディンバラに到着し、2階建てバスで町中を軽く一周した後、エディンバラ城に行った。それまで、テレビや写真でしか見たことなかったヨーロッパの城に初めて入った。門番は、例の黒長い帽子をかぶって赤い服を着たお兄さんである。城はすべて石造りである。日本の城とは、また異なった荘厳さがある。城だけでなく、

古い町並みについて日本と西洋を比べると、日本が木を中心とした建て物の文化であるのに対し、西洋が石を中心とした建物の文化であることがよくわかる。石で造る建物は、がっしりとしているがどこか冷たく、寂しさを感じ、一方、木で造った建物は、繊細で暖かさを感じる。これは、日本人としてのひいきかもしれないが、

さて、次にエディンバラ大学に行った。エディンバラ大学は、歴史が古く、建物はおそろしく威厳に満ちていた。ただ、最近増設された学部の建物は、コンクリート造りであり、日本の建物と大きな違いはなかった。かつて米国に行ったときに、UCバークレイに行ったことがある。このときは、同行した友人の知り合いにその大学の講師がいたので、研究室を案内してもらった。研究室は、日本の大学(といっても阪大工学部であるが)とそれほど違いはないが、大学内に緑(特に芝生)が多く、芝生に寝転がっている学生が多くいたことが印象的であった。建物は同じようなコンクリート造りであるのに、日本と米国でこんなに違うものかと驚いた。これは、バークレイよりもかなり古い大学であるエディンバラ大学でも同じ様に緑が多く、さらに別の日に行ったグラスゴー大学でも同じであった。土地があるからこのように緑が多くできるのかもしれないが、日本の大学がもっと見習ってほしいところだと思う。

3. グラスゴーにて

まだ自分の発表が終わっていないので、のんびり観光ばかりしているわけにも行かず、遅れている発表原稿の仕上げにかかった。もちろん昼間は、会議に出席している。そうこうしているうちに1日1日が過ぎて行き、発表の日が近づいて来た。しだいに緊張感が高まるが、発表当日には、開き直っていた。さて当日、流暢な英語で、発表そして質疑応答を見事にこなし(となる予定だったのだが…)、無事(?)発表が終わり、緊張が解け気持ちが軽くなった。やっと観光を楽しめそうである。とは言うものの、帰国予定日まで残り3日しかないの、英国国内観光に限られる。まず、学会会場のある都市にもかかわらず、ホテルと会場の往復しかしてい

なかったグラスゴーの街を少し見てまわることにした。グラスゴーは、スコットランドでも有数の工業都市だそうであるが、今は少しきびれた雰囲気が感じられる。それでも、夕方になると、仕事帰りの人であろう、それまでどこに隠れていたのかと思うくらい多くの人で、中心街は活気づく。すでに述べたが、グラスゴーにもグラスゴー大学という古い大学があるので、行ってみた。ここも大学内には多くの緑があった。それにしても、昔の大学というのは、いかに堂々としているのであろう。建築様式が違うといってしまうえばそれまでだが、最近の建物は、どこの国でもコンクリート造りであり、背は高くなっているが、味気ない。もちろん最近の建物は、機能優先でインテリジェント化されているので、何かと便利になっており、実際に使うためには、最近の建物の方が良いのだが。ここで、研究室の学生さんたちに土産を買い、大学を後にし、ホテルに向かった。話が前後するが、このグラスゴーでのホテル生活は非常に快適であった。ダブルの部屋を貸してくれたので、非常に広々としており、後日泊まったロンドンのホテルとは大違いであった。結局、グラスゴー観光は時間の関係もあり、この日だけになってしまった。

4. 最後にシェフィールド

そして翌日、約1週間いたグラスゴーを去る。すでに、英国に出張で長期滞在している友人に連絡をとり、会う約束をしている。場所は、イングランド地方のシェフィールドという街で、ロンドンの北方でイングランドのほぼ真ん中に位置する。この街の郊外に、大阪南の地下街ほどある広大なショッピングセンターがあった。郊外にあり、交通手段は自動車しかないのも、これまた広大な駐車場があった。彼によると、それがこの街の唯一(?)の自慢だそうである。日本と同様英国でも、自動車の増加は問題となっているらしく、この町でも、中心街への車両規制を行う予定になっているのだそうである。特に平日の朝と夕方が混雑するので、この時間帯は、中心街への自動車乗り入れを全面禁止にし、その代わりに、路面電車を走らせるようにする計画になっており、そのための工事が進められて

いた。バスではなく路面電車にしたのは、おそらく公害の問題であろうと思う。シェフィールドでは、友人の家に泊まらせてもらった。閑静な住宅街にある、一戸建てのかなり大きな家に彼は住んでいた。費用はもちろん会社持ちであるとのことで、この不況のおりに思い切ったことをする会社だとも思ったが、それほど高くないようであった。住宅事情が日本とは違うのであろう、我々の年代が日本でこのレベルの家に住むためには、一発当てるか、よほど危ない橋を渡る仕事をしなければならぬような気がする。もっとも、日本の企業に勤めているから住めるのであって、英国の同年代にとっては高額でとても住めないことを考えると、同じようなものかもしれない。

この夜、初めて、パブに行った。土曜の夜ということもあって、店の中は大きな人間でごった返していた。ほんどが立っており、ビール片手に大声で議論をしていた。聞き耳を立てて、近くにいるおじさんの話を聞こうとしたが、速射砲のようにでてくる英語にとってもついて行かず、後はただ、話し声が騒音となって耳に入ってくるだけであった。彼の家に戻って見たテレビのアナウンサーの英語の聞きやすいこと。ちょうど日本語を少し勉強した外国の人が、早口でしゃべる大阪の漫才を聞いているようなものであろうか。次の日、車で街から少し離れ、田舎へ向った。そこには、城があるということで行ったのだが、あいにく門が閉められており入ることができなかった。郊外を外れると山の中に入り、次の集落まで何もない山道が続く。英国には高い山はないが、このあたりは、日本の田舎とよく似ており、故郷(奈良)に帰ってきたような気になった。となりの町までドライブし、駅で降ろしてもらい、ロンドンに向かうためにシェフィールドをあとにした。

5. そして社会人へ

ロンドンで一泊し、翌朝ヒースロー空港に行き、英国航空005便の快適な旅で日本に戻った。帰りは何事も無く、天候も良く、定刻どおりに成田についた。これで、私の初めての英国旅行が終了した。短かったが、その分充実した日を

過ごすことができ、たいへん満足している。これから私は、今までと違った環境で、初めて社会人を経験する。期待と不安が入りまじった複雑な心境であるが、今回の初めての英国旅行のように、色々なことを吸収し、充実した1日を

過ごして行きたい。さて、数年後、私はどのような研究者、どのような人間になっているだろうか。

最後になりましたが、このような数少ない機会を与えていただきました工学部生産加工工学科教授丸尾大先生に感謝いたします。



協 会 通 信

新理事長に

荻野和己氏 就任

去る5月17日に開催されました本協会の定例理事会で、昭和63年6月から6年間の長期にわたって協会の理事長をお勤め頂きました長谷川嘉雄氏が退かれ、その後任に荻野和己常務理事が就任されることが決まりました。本件は、5月27日に大阪大学工業会会議室で開かれた総会におきまして、協会会員のご承認を得ました。